

外部検定利用入試 2020年は微増！ 2021年新入試も増加の見込み！

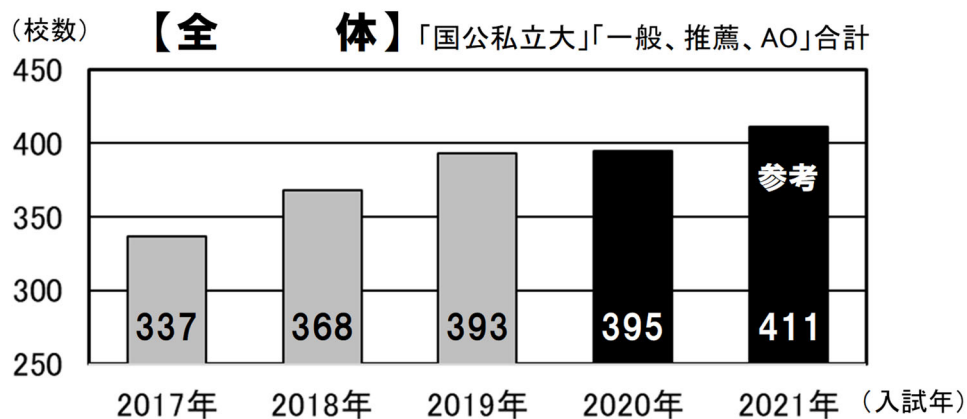
旺文社 教育情報センター 2020年3月2日

旺文社 教育情報センターは、全国の大学の入試要項を調査し、現在行われている2020年入試での英語の外部検定(外検)の利用状況をまとめた。

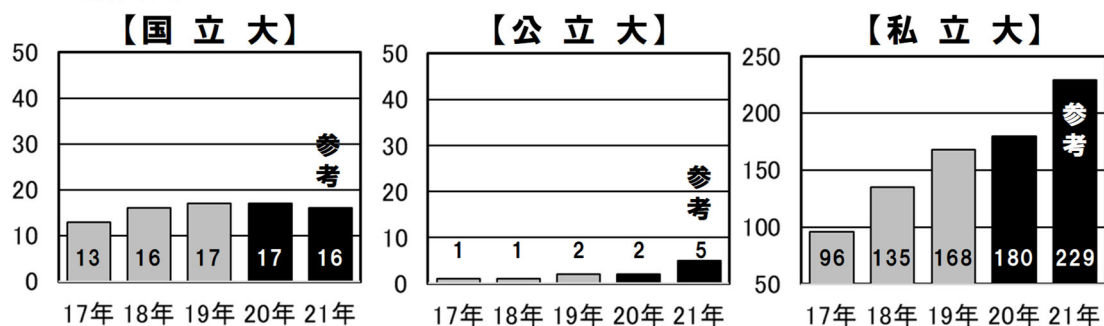
その結果、外検利用校数は微増、利用できる外検は英検が最も多く、利用できる外検レベルはCEFR B1(≒英検2級)がボリュームゾーンとなった。

また、新入試初年度の2021年については、参考として文科省調査の数値を掲載した。これによれば2021年の外検利用校はさらに増加する見込みだ。

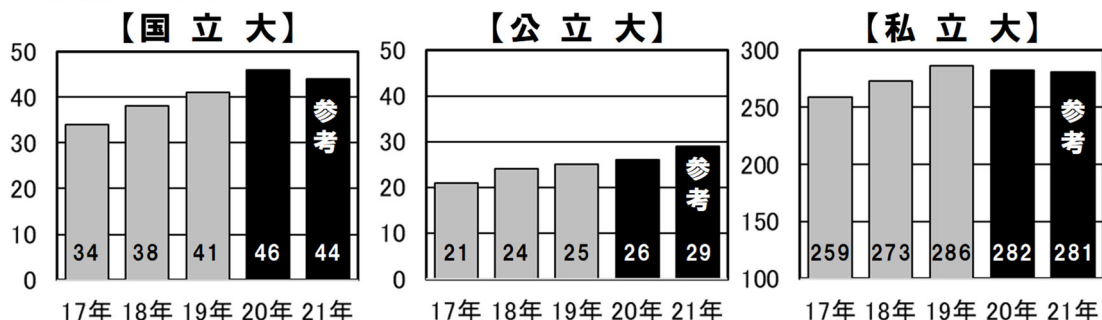
●外検利用大学数



<一般入試>



<推薦、AO入試>



※専門職大学、通信のみの大学、文科省所管外の大学校は除く。

※2020年までは旺文社調査。2021年は文科省調査で参考値(「大学入試英語ポータルサイト」1月8日段階)。

【2020年概況】

これまで毎年大幅に増え続けた外検利用校は、2020年は比較的波静かで微増にとどまった。私立大の一般入試では12校増加したが、もともと推薦・AOで利用していた大学が多く、全入試の合計校数にはあまり影響しなかった。

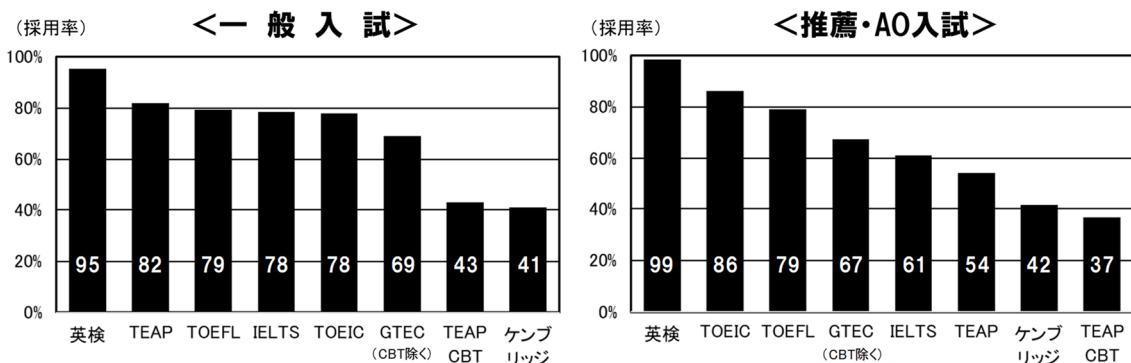
2020年が低調となった要因は、新入試の改革前年に大きな変更(外検の新規利用)を避けたのだろう。また、2021年から成績提供システムが稼働予定だったことを考えれば、あえて2020年から外検を導入しようとはしない。たった1年のために入試業務を変えるリスクは取らないはずだ。

【2021年概況】

各グラフには新入試初年度の2021年の数値も示した。こちらは文科省調査であるため「参考」とした。文科省調査では未集計の大学が30校ほどあり、この数値はさらに伸びる。旺文社調査の2020年までとは厳密に比較はできないが、それでも2021年は増加すると見ていいだろう。

昨年11月の成績提供システムの見送り以降、テレビや新聞で新入試に関する情報が錯綜している。今の高校2年生の中には、外検入試が行われないというイメージを持っている人も多いだろう。しかし実際はそうではない。押さえておきたいポイントは次の2点だ。(1)外検利用校はこれまで以上に多くなる見込み。(2)ただし利用するとしてもほとんどの大学が少人数枠で、外検を持っていないでも受けられる通常の入試の方がメインだ。

●各外検の採用率(2020年)



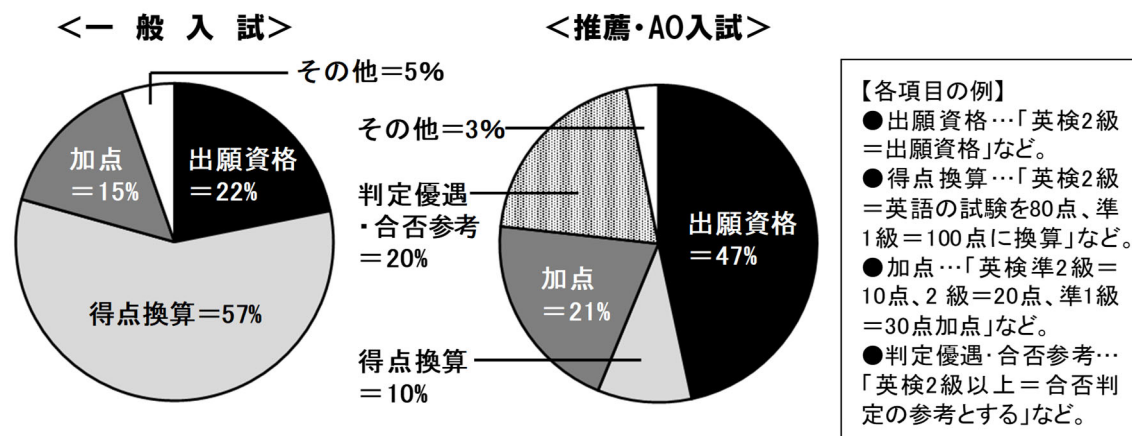
- ※全国の大学で行われている外検入試の中で、各外検が採用されている割合を算出。
- ※原則、学科単位で集計。1つの学科で複数の入試方式がある場合、外部検定の利用内容が同じなら「1」、異なるなら別々に計上。
- ※各外検の採用については募集要項に記載されているものをすべて計上。「それに準ずる外検でも出願可」のような記載の場合は、すべての外検が採用されているとして計上。募集要項の文面から記載以外が有効と読み取れない場合は採用としていない。
- ※TEAPは2技能と4技能、TOEICはLRとLRSW、TOEFLはiBTとJC、GTECは3技能と4技能を合算。
- ※GTECは「CBTタイプ限定」の大学は除く。一方、「GTEC CBTタイプ」はGTECの改称で大学側の表記がまちまちになり、正確な採用数の判断が難しいため割愛した。

採用率とは、全大学の外検入試の中で、その外検が利用可とされている割合だ。採用率が高いほど、多くの入試で利用できることになる。

採用率の1位は一般入試も、推薦・AOも例年どおり英検で、ほとんどの大学で利用できる。いずれの入試も大枠「1位＝英検」⇒「2番手集団＝その他」⇒「3番手集団＝TEAP CBT、ケンブリッジ」となる。全体的には各外検の採用率は伸びている。特に一般入試では、これまでは各外検でもっとバラつきがあったが、2018年3月にいわゆる認定試験が発表になったことで※、2020年入試から「認定試験 全採用」の大学が増えたことが要因と考えられる。

※文科省は2017年7月の「大学入学テスト実施方針」で「できるだけ多くの種類の認定試験を対象として活用するよう各大学に求める」としていた。

●外検の利用方法(2020年)



※全外検入試における外検利用方法の割合。「出願資格かつ得点換算」などは別々にカウント。

外検の利用方法は「出願資格」「得点換算」「加点」の大きく3つに分けられる。推薦・AOの場合はさらに「判定優遇・合否参考」が加わる。一般入試では「得点換算」が多く、推薦・AOでは「出願資格」が多い。

【一般入試】

一般入試で「得点換算」が多いのは、大学にとって幅広く受験生を集めつつ、ハイレベルな受験生の獲得も見込める方式であることが一つの要因だろう。利用できる外検スコアを手の届きやすい

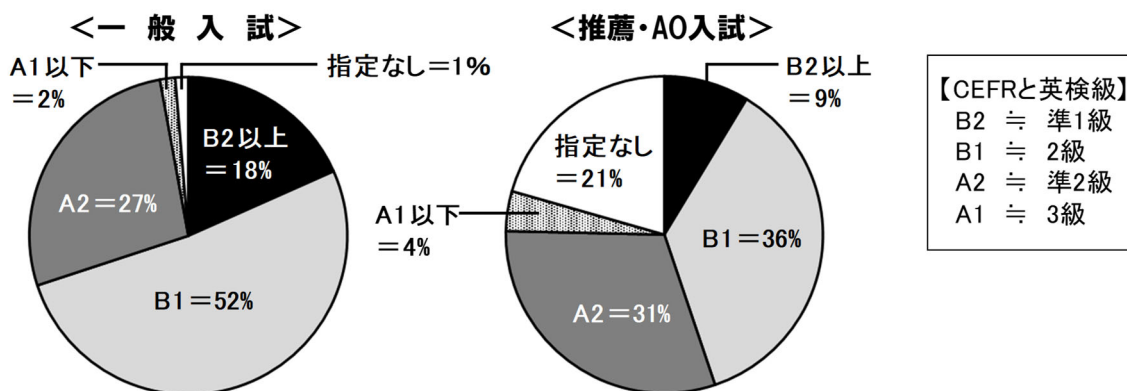
レベルから高いレベルまで設定することで、広い層の外検取得者におトク感(得点が保証されている安心感)を与えることができる。また、非取得者にとっても「加点」ほど不利な印象はなく、敬遠される可能性も低い。

なお私立大は一般入試全体で(全利用方法の合計)、センター利用入試での外検利用が 3 割程度。7 割が独自入試での利用だ。国公立大の場合は「得点換算」で見ると、センターの英語に換算が 8 割、個別試験の英語に換算が 2 割となる。

【推薦・AO 入試】

推薦・AO で「出願資格」が多いのは、そもそも推薦・AO が高校時代の活動を評価する性質が強いこと、大学が求める人材をダイレクトに出願資格で限定しやすい入試であることが要因であろう。「判定優遇・合否参考」が多いのも特徴で、これは一般入試のように 1 点刻みの評価がなじまない推薦・AO ならではの「ボンヤリ」した利用方法だ。「得点換算」が少ないのは、学力試験を課していないケースが多いからだ。

●利用できる外検のレベル(2020 年)



※各大学の外検入試で利用できる最易レベルを集計。

例①: 得点換算で「A2=80点、B1=90点、B2=100点」⇒「A2」で集計。

例②: 「B1が出願資格で、B2はさらに10点加点」⇒「B1」で集計。

※調査対象とした外検は英検で、級やCSEスコアをCEFRに換算。

利用方法を問わず、大学入試で外検を利用するにはどの程度のレベルが必要か。グラフは各大学の外検入試で利用できる「最易レベル」を集計したものだ。全体的には少なくとも A2(≡英検準2級)以上が必要だということがわかる。

【一般入試】

ここ数年は「B1(≡英検2級)以上が増加、B2(≡英検準1級)以上が減少」という傾向にある。B1には特に東京の私立大が多く、規模が大きいこともあり、ここがボリュームゾーンとして膨らむ。A2(≡英検準2級)でも国立大、有名私立大の理系学部、地方私立大を中心に利用できる場所は多い。

なお一般選抜で「B2(≡英検準1級)以上」が2割近くある。「最易レベルがB2?」と驚いてしま

うが、その多くが得点換算でいわゆる「みなし満点」しか設定していない大学だ。大学によっては、利用者はほとんどいないと聞く。

【推薦・AO 入試】

一般入試と比べて求められるレベルは低い。これは学力以外の部分も評価するという推薦・AOの本質的な理由のほかに、「出願資格」で利用する大学が多いこと(あまり高く設定できない)、一般入試よりも難易度の低い大学まで幅広く外検を利用していることが要因といえる。

「レベル指定なし」も一定割合あるが、利用方法「判定優遇・合否参考」に該当するケースが多い。「外検のレベルは問わないが、出しておけば判定の参考にする」というものだ。



特に P.1 の一般入試のグラフを見てわかるとおり、外検入試の拡大を牽引してきたのは私立大であり、国公立大はなかなか伸びない。成績提供システムの構想があったときは、国公立大のほとんどで 2021 年からの外検利用が予定されていたが※、システム見送りにともない、多くの国公立大で外検利用を見送った。

※2019 年 10 月末現在の文科省調査では、2021 年の成績提供システムの利用予定校数(外検入試の実施校数ではない)は全入試合計で、「国立大=78 校(95.1%)」、「公立大=78 校(85.7%)」、「私立大=382 校(65.1%)」。

この現象をどうとらえるか。今回の件は(1)国や大学協会の方針、(2)大学のアドミッションポリシー、(3)入試業務の現実性(成績提供システム)の 3 つのうち、一体どれが強いのが露呈したように思う。一番強いのはわからないが、一番弱いのは(2)だ。「本当は(外検利用を)やりたくなかったのに、国や協会からやれと言われたからやろうとしたんだらうなあ」と思われてもしょうがない。しかしこれでは受験生はたまらない。

(2)が一番弱いことにガッカリしてしまう反面、もしこれが一番強ければ、各大学が入試で好き勝手にやるだけで、日本の大学入試はいつまでたっても改善しない。各大学の入試がバラバラでは、それもそれで受験生はたまったものではない。

大学の公共性が強い以上、(2)よりも(1)の方が強くあるべきだと考える。しかしそこには国と大学、両者の歩み寄りがあってほしい。国は重要な方針を決定する際、もっと大学(高校も)の意見を吸い上げることが必要だ。場合によっては差し戻しもある。大きな方針を決定するには時間がかかるということだ。

そう考えると入試改革のほかの部分にも不安がよぎる。主体性の評価は？ 独自入試の改善は(記述式の導入など)？ 「本当はやりたくなかったのに…」で各大学が導入しても、長続きはしない。

(2020.3 石井)